

会報

富山県公立小中学校教頭会

No. 112

令和8年3月1日発行

〒930-0018

富山市千歳町1-5-1

富山県教育記念館内

富山県公立小中学校教頭会

発行者 会長 吉川 浩二

編集者 代表 結城 和美

印刷 株式会社チューエツ



流行を見極める

富山県小中学校長協会

副会長 蓑 口 義 裕

「あれ、教科書がない？」

十数年前、市中学生オーストラリア派遣団の随行者として現地中学校の授業見学をした際の私の率直な感想です。筆記用具、ノートもなく、生徒はタブレット一つで学習していました。正直なところ、その当時は、日本には教科書があり、全国どこでも一定の学力を保障することができる、日本の教育力や教員の指導力の高さを誇らしく思う自分がいました。

そして五年前、私たちの教育現場に一人一台の学習専用端末が斉に導入されました。昨年九月には、次期学習指導要領が小学校で全面实施予定の二〇三〇年度から、完全デジタル、紙とデジタルを組み合わせたハイブリッドの三種類の教科書を取り入れることを

文部科学省は想定しているとの報道がありました。

教科書一つを例にとっても、学校を取り巻く環境が急速に変化していることを感じずにはいられません。

「不易と流行」という言葉があります。教育DX、小学校教科担任制、部活動の地域展開、中学校三十五人学級導入等、早い周期で様々な流行の波が押し寄せていますが、その本質はどこにあるのか、どのような未来につながるのかを、理解することなしに改革は進みません。国や県、市町村が掲げる教育方針の下、児童生徒や地域の実態等を踏まえた上で、子供たちを主語にしたよりよい教育活動を展開していく責任が学校にあります。そういう意味から、管理職の役割

はこれまで以上に大きくなると考えます。

話は変わりますが、以前、東京オリンピック陸上競技代表の寺田明日香さんの講演を聞く機会がありました。何度も訪れた人生の転機で進むべき道の判断を迫られた時、「選択の基準を決める」「チャレンジを恐れない」「味方を見つける」の三つの視点を大切にすると話されました。この言葉の中にも、これから幾度も押し寄せるであろう「流行」の波をしっかり見極め、乗り切るためのヒントが隠されている気がします。思いを伝え合い、創造力を働かせながら、子供まん中、教職員まん中の学校づくりに会員の皆様と共に笑顔絶やさず取り組んでいきたいと思えます。

研修の

東海・北陸地区公立学校教頭会 「富山大会」に参加して

氷・十二町小学校 江村 拓之

「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり」の大会主題の下、地元富山にて東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会が開催された。

一日目の記念講演では、国立環境研究所の特命研究員である五箇公一氏が「地球の未来と生物多様性」持続的発展を目指して」という演題で話をされた。五箇先生の軽妙な語り口に引き込まれ、時間が経つのを忘れて聞き入った。そして、それぞれの生物が絶妙なバランスを保ちながら維持されている生物多様性が、外来生物や感染症、農薬等の影響により壊されることに、改めて危機感を覚えずにはいられなかった。

二日目には、「子どもの発達に関する課題」の分科会に参加した。

「個に応じた支援を行うための校種間連携の在り方」の提言発表では、幼保小連携、中学校同一校区内での小中連携、小中連携、関係諸機関との連携の具体例が紹介された。

また、「不登校防止対策のための体制づくりと不登校児童に対する支援」の提言発表では、教頭の役割という切り口から、未然防止策、早期発見・対応、教職員研修、専門スタッフ・関係機関との連携、校内教育支援センターの開設・運営についての具体的な取組が紹介された。

どちらの提言も、教頭としての働きかけの大切さが示され、とても参考になった。また、グループ協議では各々の勤務校の実情をふまえながら成果や課題について活発な意見交換がなされ、考えを深めることができた。

この研究大会では、講演や分科会を通して、日頃自分が意識していない新鮮な感覚を感じ取ったり、魅力ある学校づくりに向けて教頭としてどのように取り組むべきかを考えたりする貴重な機会となった。今回得られた学びを生かし、今後も日々職務を果たしていきたいと思う。

東海・北陸地区公立学校教頭会「富山大会」に参加して

中・上市中央小学校 杉村 和宏

「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」を研究主題に掲げ、二日間の富山大会が開催された。

初日は、五箇公一氏による記念講演を聴講した。五箇氏は、サブカルやワンヘルスの視点から生物多様性と人間社会のつながりを解説し、便利さの裏にある環境負荷を自分事として捉え、共生と持続可能性を学ぶ教育の重要性を訴えていた。学校においても、一時的な対策ではなく持続可能なものを探るため、視野を広げて学校の財をもう一度見極め、工夫できることを考えていきたいと感じた。

二日目は、「子どもの発達に関する課題」をテーマにした第二分科会に参加した。「個に応じた支援を行うための校種間の連携の在り方」「不登校防止対策のための体制づくりと不登校児童に対する支援」の両提言を聞き、小グループで協議した。校種や学校規模が異なる参加者で意見を交換したり、それぞれの苦労を共有したりしながら、学校の財を最大限活かす対応や取組について学べたことは大変意義深かった。また、どちらの協議でもスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等を活用するために、子供、担任、親、地域をつなぐ教頭の役割について話が出た。多様な人材を的確につなぎ、より効果的な方法を考えていくことが教頭の役割だと感じた。

二日間の研究会を通して、改めて教頭として役割を考えることができた。今後もそれぞれの学校の高さや財を活用し、魅力ある学校づくりに努めていきたい。

あか西

自ら「幸せ」をつくる力を育てる

小・大谷小学校 藤森 範子

本校は、昭和四十年四月に正得、松沢、若林、荒川の四つの小学校の統合により誕生し、今年度創立六十周年を迎えた。校舎が大谷製鉄の創設者である大谷竹次郎氏の寄付によって建てられたことが学校名の由来である。また、本校には、「一心・努力・報徳」という「大谷精神」が受け継がれている。本校には、**「困いさつ（挨拶）・困りがとう（感謝）・困（仕事）」**の四つ（**「整頓」・「困せ（仕事）」**）の四つ（**「あ」**）で表す**「しあわせ運動」**も長く受け継がれている。日々の生活の中で四つを意識して行動できるよう児童会を中心に取り組んでいる。毎月四の付く日を「しあわせの日」として、全校児童に取組が意識付くよう工夫をしている。また、「しあわせの花を咲かせよう・実を育てよう」と呼びかけ、しあわせ運動の取組に応じた色シールを貼ることで、取組を可視化し、達成感をもてるようにしている。



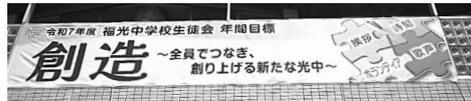
本年度から、大谷小・中学校においてコミュニケーション・スクールを導入し、保護者や地域、学校が手を結び、一体となって学校づくりを進めている。地域に愛着をもち、ふるさとで生きる子供たちを支え、育てていく上で大きな強みにもなっている。本校の今年度の重点目標は「自ら『幸せ』をつくる力を育てる」**「HAPPY GO」**である。変化が激しく予測困難なこれからの時代において子供たちに自分で考え行動する力を身に付けてほしい。「幸せとは？」を子供と教職員が共に問い続け、一人一人が自身の幸せをたくましく追求できるように、今後も教頭として真摯に取り組んでいきたい。

福光中学校の「四本柱」

南・福光中学校 藤田 稔

本校の生徒会には、福光中学校の生徒として大切にしたいことが「四本柱」として受け継がれてきている。「挨拶」「時間」「ボランティア」「歌声」の四つである。この「四本柱」は、生徒会目標の設定や委員会活動、各種行事の中で意識され、取り組まれてきた。

しかし、近年、この「四本柱」がやや形骸化してきていることは否めない。果たして生徒たちは、どこまで本気でこの「四本柱」を守りべき伝統にしているのか？と考えることがある。そこで我々教員は、様々な機会を通して生徒たちに問いかける。「本当に『四本柱』を意識しているのか？」と。学校生活の充実と向上を目指す生徒会活動において、このような見直しを図ることは、とても有効な活動となるはずであるが、なかなかうまく進まない現状があった。そのような中、少しずつ生徒の中から「四本柱」に関する取組が見えるようになった。例えば、生徒総会での「光中の四本柱」をテーマとした討論会や生活委員会の挨拶運動、体育文化委員会の歌声集会、環境ボランティア委員会の牛乳パックやアルミ缶回収等である。生徒会活動だけではなく、福光中学校の様々な教育活動においても「四本柱」を大切に行っている姿が見えてきた。



また、この現状を見つめ直すきっかけがあった。学校統合である。南砺市の福光地域学校統合検討委員会が、令和十年四月一日に地域内の小・中学校を統合し、中学校二校を一校にするという方針を示したのである。およそ二年後になる。福光中学校として次の学校に引き継いでいきたいものは何なのか。これは、生徒たちにとって、直面せざるを得ない大きな課題の一つである。

今回の統合を機会に、福光中学校の八十年の歩みを振り返り、生徒たちの生徒会活動が一層充実することを願っている。それと同時に、我々教員にとっても、教育活動全体を見直し、ブラッシュアップする機会にしなければならぬ。生徒とともに、福光中学校の伝統を次の時代へとつないでいきたい。

学校活動の紹介

「小さな学校の大きな強み」

滑・東加積小学校 永井 快行

本校は、校区に関係なく、市内のどこからでも通うことができる「小規模特認校」です。児童数は四十一名で、二・三年生と四・五年生がそれぞれ、複式学級となつています。

小規模校ではありませんが、「自ら学び考え、ともに認め合う子供の育成」の学校教育目標を実現させるべく、教職員、保護者、地域が一体となつて子供たちの挑戦を後押ししています。

小規模校だからこそその強みと言える、特徴的な活動を二つ紹介します。

一つ目は「全校児童の前で行うスピーチ」です。本校では、全校児童、全教職員がランチルームで一緒に給食を食べます。全員が集まるので、お昼の校内放送の代わりに、児童が前に出て直接、委員会や学年からのお知らせ、献立の説明等を話します。給食の始めと終わりの挨拶は、全校児童が順番に担当し、終わりの挨拶の前には、今頑張っていること、自分が体験したこと等をスピーチしています。人前で発表することに自信がつくとともに、互いに認め合える関係づくりが自然とできていると感じています。

二つ目は「地域住民と一緒に合同運動会」です。本校の運動会は地域の住民運動会と合同で行っています。保護者を含む地域住民と児童は、チームも競技も別々ではありませんが、互いに応援し合い、非常に盛り上がりがあります。準備や片付け、運営は地域と学校が協力し合い進めています。運動会以外にも、地域の方を学校に招いたり、地域の活動に児童が参加したりする機会が多く、地域に根差した、地域と共にある学校と言えます。

前述の二つ以外にも「自分たちの課題について全員で話し合う東つ子サミット」「六年生が企画、運営する全校かくれんぼ」「他校児童や年長児と交友関係を深める交流会」等、小規模校ならではの教育活動により、子供たちは生き生きとたくましく学校生活を送っています。教職員もその輪に加わり、子供たちをチームで支えながら、本校らしさを存分に生かした教育活動を今後も進めていきます。

学校活動の紹介

「みながこころ 自分がこころ 楽しい上青小学校を目指して」

下・上青小学校 永原 みどり

本校では、「自ら学び、たくましく生きる子供」の育成を学校教育目標に掲げ、本年度の重点目標「みんなで作る 自分がつくる 楽しい上青小学校」の実現に向け、子供の主体的な活動を大切に行っています。

本校の特色ある教育活動として、年二回実施している「沢スギの日」を紹介します。校区には、国内で唯一自然の沢スギが自生し、地域で守られてきた「沢スギの沢スギ」があります。国指定天然記念物であり、全国名水百選にも選ばれている豊かな自然の中で地域の人々と触れ合い、郷土愛を育む活動として長年受け継がれています。

「沢スギの日」の活動は、子供が興味・関心をもち主体的に学ぶことができるよう、学年の発達段階を踏まえて計画を立てています。一年生は、エゴの花で石鹸を作ったり、笹舟を小川に浮かべたりと自然の物を使った遊びをします。二年生は、沢スギ林を探検し、花や実で飾りを付けたオリジナルのリースを作ります。三年生は、ウォークラリーを通して木の年輪の数え方や沢スギに生息する昆虫や植物について学びます。四年生になると、自分の好きな植物や木を選び、春と秋の様子を比較しながら観察カードにまとめます。子供は、豊かな自然の中で地域の人々から多くのことを学ぶことができる「沢スギの日」を楽しみにしています。

五・六年生は、文化財愛護少年団員として地域のボランティアの方々と杉の葉（スンパ）を何袋も集め、沢スギ林を清掃しています。六年生は、春に杉の苗を植樹し生長を観察しながら、これからは沢スギを守っていききたいという思いを抱いています。

このような活動から、自然や郷土を大切にすることが育まれていることを嬉しく思います。自然体験や地域の方々との温かな触れ合いは、子供が「生きる力」を育成する上で貴重な教育活動であると考えます。子供が主体的に学び、考え、行動する活動を大切にし「みんなで作る 自分がつくる 楽しい上青小学校」の実現に向けて全教職員で力を合わせていききたいと思っています。

このように活動から、自然や郷土を大切にすることが育まれていることを嬉しく思います。自然体験や地域の方々との温かな触れ合いは、子供が「生きる力」を育成する上で貴重な教育活動であると考えます。子供が主体的に学び、考え、行動する活動を大切にし「みんなで作る 自分がつくる 楽しい上青小学校」の実現に向けて全教職員で力を合わせていききたいと思っています。



探訪記



木曾義仲像

高岡市には、いくつもの祭りが
あります。大きな祭りとしては、
ユネスコ無形文化遺産「御車山
祭」をはじめとして、「伏木曳山
祭(けんか山祭)」、「御印祭」等
が有名です。

市では、五月一日を「高岡の歴
史文化に親しむ日」としており、
小中学校は休業日となり、御車山
祭に参加しやすい体制が整えられ
ています。子供たちは、曳山に参
加したり見学したりして、伝統あ
る祭りに親しみます。

また、国宝「瑞龍寺」「勝興
寺」があり、一つの市に二つの国
宝があることは、高岡の誇りです。
どちらの寺院も歴史があり、春夏

秋冬それぞれに荘厳な姿を見せて
くれます。先人の思いにふれてみ
たいと、全国からたくさんのお観
光客が訪れます。

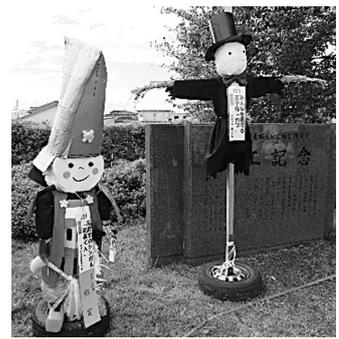
さらに「古城公園」は、二代藩
主の前田利長公が、高岡の地を加
賀百万石の中心地にすべく築いた
「高岡城」が元となっています。

自然の河川や湿地をそのまま堀と
して利用した日本有数の水城で、
続日本百名城の一つです。この高
岡城が完成していれば、金沢城の
二倍以上の規模になったと考えら
れます。

江戸時代に、鑄物の町高岡の町
人によって建てられた「高岡大
仏」は、高岡のシンボルとなっ
ています。

このような歴史と文化の町高岡
にある中田小学校区では、地域と
つながる次のような取組がありま
す。

中田小学校の近くにある「弓の
清水」には、平安時代末期、木曾
義仲が兵たちの喉の渇きをいやそ
うと地面に矢を射ると、そこから



児童が制作したかかし



かかし音頭踊り

泉が湧き出したという言い伝えが
あります。今でも、ホタルが舞う
美しい清流を見ることができま
す。毎年、四年生の子供たちは、「弓
の清水」をはじめ、校区四か所の
清流の水質調査「水のすこやかさ
調べ」を行っています。

また、「かかし祭り」では、子
供たちが、地域の方たちに作り方
を教えていただきながら、わらや
発泡スチロール、古着等を利用し
て、かかしを何体も作って展示し
ます。当日は、地域の踊り同好会
の方たちと一緒に「かかし音頭踊
り」を踊ります。

中田小学校を含め、高岡の子供
たちは、豊かな歴史や文化、自然
地域の中で、それらを守り伝えて
きた人々と触れ合いながら元気に
育っています。未来を担う大切な
子供たちが、ふるさとへの愛着を
もち、心豊かに成長できるようにさ
らに努めていきたいと思えます。

高・中田小 須古 充

明治十一年の開校から百四十八年。地域と共に歩ん
できた本校は、令和八年三月、その長い歴史に幕を下
ろすこととなりました。

本校の正面玄関には、「有隣」という書が大切に掲
げられています。「徳をもって歩む人」には、必ず共鳴
する仲間が現れる—— 論語をルーツとする、この言
葉は、創立以来、本校に息づく教えであり、校歌の一
節「我らも日々に徳を積み、高く動かぬ名をなさん」
でも、「人に思いやりをもって、正しい行いをして自
分を磨いていこう」と歌い継がれてきました。

今年度、子供たちは日々の活動の中で、心にあふれ
る感謝の気持ちをたくさん届けてきました。運動会
の閉会式では、全校児童が「創校百四十七年、ありが
とう水橋西部小学校！地域のみなさん、ありがとうござ
います！」と、元気いっぱい声をグラウンドに響か
せました。学習発表会でも、会場の皆様と心をつな
げて校歌を合唱しました。真っ直ぐな歌声と「ありが
とう」の言葉は、その場にいた人々の心に、温かく深
く刻まれたことと思います。

本校の子供たち「天瀬っ子」は、とても純朴で優し
く、何事にも粘り強く取り組む強い心をもっています。
天瀬っ子は、家庭の温かな見守りの中で、地域と学
校が手を取り合って育んできた大切な宝物です。春に
は、義務教育学校「水橋学園」へと学びの場が移ります。
新しい環境に戸惑うこともあるかもしれませんが、「有
隣」の灯火は、子供たちの心の中でこれからも輝き続け、
新たな学び舎をも明るく照らしてくれるものと信じて
います。

これまでの歴史に心からの感謝を込め、子供たちの
新しい門出を、地域の皆様と共に最後まで温かく支え
ていきます。



富山市立水橋西部小学校
三箇 智絵



令和七年度「第二回 全国研究部長会」から

研究部長 山本 泰 (富・南部中学校)

令和七年度第二回全国研究部長会が十二月五日(金)に都市センターホテル(東京)及びオンラインでハイブリッド開催された。

【全体会】

稲積会長の開会の挨拶に続いて、稲生茨城県研究部長から第六十七回茨城大会の成果と課題が報告された。

成果

- ・参加者の九十%以上が記念講演やシンポジウムの内容に満足している。
- ・メールによる情報提供やQRコードを利用した受付業務が迅速な対応につながった。
- ・分科会で同じ学校規模の教頭を同グループとしたことが、話合いの活性化につながった。
- ・分科会の提言内容が個人の研究にとどまらず、地区全体でつくりあげられたものであったことがよかった。

課題

- ・HPに掲載しただけでは周知できなかったこともあり、参加者にご迷惑をかけた。
- ・分科会の協議を長くしてほしいという意見があった。
- ・分科会の司会等の役割分担がスムーズにできなかった。
- ・初任教頭が分科会で発表しなければならなかった提言があった。
- ・続いて、道佛北海道研究部長から、第六十八回札幌大会におけるサブテーマの説明があった。第十四期となる全国統一研究主題「未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり」の主題に迫る視点「持続可能な社会の創り手の育成」「ウェルビーイングの向上」を基に、

全国研究部長会」から

サブテーマを「夢と志をもち未来をしなやかに歩み続ける力を育む活力ある学校づくりの推進」と設定したことが発表された。

【講演】

「教師の働きがい」を高める視点を踏まえた教員育成の課題と取り組みについて」の演題で、早稲田大学教育・総合科学学術院教授 河村茂雄氏にご講演いただいた。

講演の内容は、次のとおりである。

- ・学校教育に期待される教育内容は益々増加し、多様化していくため、学校組織のマネジメント力の強化が求められる。
- ・スタッフマネジメントの第一歩は取組の「見える化」であり、教員組織の状態をアセスメント・「見える化」し、具体的対応を考えなければならぬ。教育実践の成果をあげている学校は、「ビジョン」の共感・共有と「エンゲージメント」の感覚が統合して確立されている。
- ・学校教育の目的を達成するためには、「働きやすさ」だけではなく、教員たちの「働きがい」をより喚起する必要がある。

教育実践の成果を上げるために、教員が「働きがい」を実感することは重要である。教員のワークエンゲージメントを高め、「自主・向上性」と「同僚・協働性」を統合して確立することで、建設的な教員組織をつくらなければならないと考へさせられる講演内容であった。

【研究協議】

河村氏の講演を受けて、研究協議を行った。地域や校種の枠を超えた他都道府県研究部長との情報共有は、今後学校運営を考える上で新しい視点を

得ることができ、自分にとって貴重な時間となった。

東海・北陸地区公立学校教頭会 第三回役員・理事会報告

東陸教頭会役員 西村 敬洋 (砺・砺波南部小学校)

一月二十三日(金)、名古屋市の「アイリス愛知」において第三回役員・理事会が開催された。当日は記録的な大雪に見舞われ、特急「しらさぎ」が運休するという異例の事態となったが、本県役員は急遽東京経由の新幹線ルートを選択する強行軍で名古屋入りし、無事出席を果たした。

会議冒頭、会長からは、秋に開催された富山大会の成功を支えた各県の結束力への謝辞が述べられた。議事では、今年度の会務及び会計中間報告に加え、富山大会の総括が行われた。富山大会については、運営の細やかさと研究内容の充実ぶりが高く評価される一方、次年度以降に活かすべき改善点について共有がなされた。

続いて、令和八年度の役員選出や事業計画案、更には第五十四回愛知大会・第五十五回岐阜大会の準備状況、全国・東陸制当の確認等、次年度の基盤となる重要事項について審議が行われ、いずれも全会一致で承認された。また、富山県から情報交換会の費用について提案し、各県で検討していただくことを依頼した。

閉会に際し、直接顔を合わせて協議することで、山積する教育課題に一丸となつて取り組む機運を高める有意義な機会となった。大雪という困難を乗り越えて集まった役員・理事らの表情には、無事役員・理事会を終えた安堵感と今後更なる飛躍に向けた強い決意が滲んでいた。

富山県公立小中学校教頭会

令和八年度 研修活動の予定

- 郡市代表教頭研修会①②④
- ① 四月二十八日(火)午後
- ② 六月 十日(水)午後
- ③ 九月 九日(水)午後
- ④ 二月 十日(水)午後
- ◇ 全体研修会
- ・ 五月十一日(月)
- ☆ 全国研究大会「札幌大会」
- ・ 七月三十日(木)～七月三十一日(金)
- ☆ 東海・北陸研究大会「愛知大会」
- ・ 十月二十八日(水)～二十九日(木)

【編集後記】

本会にとつて、今年度の一大行事は何といつても、本県で開催された東海・北陸地区公立学校教頭会研究大会であると思います。企画、運営、研究、提言等の各分野において、会員の力を結集させ、大会を成功へ導くことができました。

そして、会員各々が大会主題である「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」への学びを深め高めたことと察します。また、各分科会での質疑応答や協議等を通して、他校の実状に共感したり、自校の課題解決への糸口を見付けたりと、教頭職の横のつながりのよさを再認識された方も少なくないのではないのでしょうか。教頭職に連帯意識を励みにして、今後も職務の適進したいものです。そのためにも本会が今後にもさらに発展することを願っています。

◆編集委員

- 結城 和美
- 河田 美保
- 澤村 梢
- 山吉 信夫
- 出口 隆子